南蛮の風紀行－27. 故国は遥かなり慶長遣欧使節団

わたしたちをバルセロナからセビーリャに運んできたのは左側奥の AVE です。

正直、バルセロナにはもう２日は居たかったです。１日はカタルーニャ地方のキリスト教の聖地であるモンセラットを、もう１日はフランク王国時代のスペイン辺境伯領に由来するアンドラ公国を訪ねることができるのですが、帰国の日が近づいてきたこともあり、本来の旅の目的を忘れることはできません。既に AVE（スペイン新幹線）の指定席も手に入れていますので、いよいよ最後の訪問地セビーリャに向かいます。日本のグリーン車には一度も載ったことのないわたしですが、５時間半の長旅ですから、ゆっくり足が伸ばせる贅沢をすることにしました。乗り込んだ時には心配になるほどすいていたのですが、発車までには結構いっぱいになりました。飛行機並みに映画はやっているし、映画と映画の合間には目的地までの進行状況を地図で見ることができます。テーブルは広いし、何より足元が広いのですこぶる快適です。揺れもレールの継ぎ目の音も少なく、日本の新幹線と同じくらい快適でした。楽しかったのはこの車両だけでペットのワンちゃん同伴の乗客が４組もいたことです。長旅の徒然を忘れさせてくれました。何せ窓の外の景色はどこまで行っても青い空と半砂漠のメセタ台地が続くだけです。さすがのわたしも車窓にはすぐに飽きてしまいました。

プレフェレンテ・クラス（グリーン車）の室内です。

セビーリャは今回の紀行の主役であるザビエル、アルメイダ、伊東マンショたち天正遣欧使節に所縁のあるまちではありません。マンショたちに遅れること約３０年、伊達政宗によって派遣された支倉常長たち慶長遣欧使節所縁の地です。今ではセビーリャ市になっていますが、旧市街から南に１２キロほど下ったところにあるコリア・デル・リオは当時、スペインの代表的な貿易港でした。どんなに大きな船、大洋をもものともしない外洋船と言っても、当時の木造船にとって最大の敵はフナクイムシでした。フナクイムシは船体を定期的に淡水にさらすことによって駆除できるということで、この時代のイベリア半島の貿易港は必ず川を少し遡ったところに開かれたのです。

３時前に旧市街の真ん中にあるこじんまりとした素敵なホテルに荷物を放り込み、遅い昼食もそこそこにタクシーを拾ってコリア・デル・リオに急ぎました。今は鄙びた河岸公

園は底抜けの青い空ですが、シェスタの時間だからか人影は絶えています。公園内をあちこち探し歩いて、ようやく店開きの支度を始めていた売店の売り子に教えてもらって、支倉常長に会うことができました。その銅像は南蛮の太陽の光をまぶしく反射させている川面を見ながら立っています。１６１５年、彼らがこの地に辿りついた時にも、この青い空が出迎えてくれたのでしょうか。

支倉常長の銅像はグアダルキビル川の川面に向かって立っていますが、なぜか背中に鳥居を背負っていました。

支倉達慶長遣欧使節を派遣したのは東北の覇者伊達政宗です。関ヶ原は東軍の勝利に終わって、徳川幕府は開幕していましたが大阪城にはまだ豊臣秀頼がいた時代です。正宗が支倉を派遣した真意は今となっては測りかねますが、交易だけが目的だったとは思えませんね。ただ凄いことにはこの時代に既に支倉常長たちが太平洋と大西洋を渡っているということです。しかも、その時に彼らが乗ったガレオン船は設計図こそスペインのものですが、仙台藩内で建造されているのです。

前年に徳仁皇太子殿下がお手植えになったサクラは、銅像の横で枯れそうになっていました。

フェルディナンド・マゼランが西回りで世界一周航路を確立して（彼自身はその途次、フィリピンで亡くなっていますが）既に１００年近く経っていました。既に設計図や航路といった情報が確立し、誰でもがその恩恵に与れるという時代が到来していたのですね。支倉達はまず太平洋を越えて当時ヌエバ・エスパーニアと呼ばれていたメキシコに渡り、そこからスペインを目指して日本を出て２年後にこの川の港コリア・デル・リオに到着したのです。

グアダルキビル川は当時は外航船が上り下りできる水深があったのですが、堆積物を浚渫することはなかったため、やがて浅くなってセビーリャの外交としての機能も貿易港としての機能も、河口のサン・ルーカル・デ・バラメダに奪われ、今日の鄙びた静かな町になってしまったようです。もちろん現在では河口まで１００キロほどありますが、当時はほとんどここが河口だったのです。陸の広がりとともに衰退していくという運命は、例えばイタリアのジェノバなどと同じですね。

涼しげな顔をして川を見つめる支倉常長像のそばには、皇太子徳仁殿下が１年前にお手植えになったサクラが水を欲しがっていました。皇太子は日本とスペインの交流４００周年を記念してこの地を訪問されたのですが、その起源は支倉常長に始まっているわけです。この今となってはスペインのどこにでもある田舎でしかない町に、実はハポン（日本）と

トレドの時でもそうでしたが、旧市街という事は城郭都市の中、道は全てこんな感じです。これでも歴としたホテルの入口の前の通りです。

いう姓を持つ人々がいます。慶長遣欧使節の団員のうちの何人かがこの地に残り、今では６００人もハポンさんがいるそうです。

午後の日差しを避けてベンチに座り、川面を渡ってそよいでくる心地よい南蛮の風に吹かれながら、しばし残った人々はなぜ故国を捨ててこの地に残る決心をしたのか、その選択の結果としての彼らの人生はどうだったのかと思いを馳せることにしました。

もっとも帰国した支倉達を待っていたものも決して望ましいものではありませんでした。支倉自身は帰国２年目に急死していますし、彼の家系も伊達政宗の死去した次の年には一度断絶しています。（支倉家は常長の孫の代に再興しています）彼が帰国した１６２０年には既に豊臣家は滅び、徳川の世は万全たるものになっていました。何らかの野望を持って支倉を派遣した正宗やその嗣子忠宗にしてみれば、自分達が命じたこととはいえ、いやむしろそうだからこそ幕府への手前、支倉常長の存在は邪魔になっていたのです。中世から近世への変わり目を浦島太郎として時をまたいでしまった人間の宿命として仕方のないことだったのでしょうか。我らが天正遣欧使節の４人もその晩年は決して幸福とは言いがたいものだったのですから。

人の世の有為転変を思いながら、セビーリャ市内のもどったのですが、わたしとしたことが道に迷ってホテルにまっすぐに帰れないのです。タクシーは旧市街の中までには入れませんので、ホテルに最寄りのタクシー・ベイで下してもらったのですが、一度は歩いて通ったはずの道をなかなか思い出せません。中世、この町（この城）に攻め込んだサラセン人になった気がしました。あちこち彷徨ってようやくホテルを見つけた時には、路地はすっかり暗くなっていました。